

附論 自由民権家・法貴発の記念碑についての一考察

石川芳己

一 はじめに

明治二十三年十二月、丹波篠山の自由民権家・法貴発は肺結核により、その四十五年の生涯を閉じた。

その後、明治三十年頃に、法貴の事績を顕彰する石碑が、笹山町の王地山公園内に建立され、現在に及んでいるが、今は、訪れる人もなく荒れ果てた状況である。

ところが、筆者は、全く思いがけないことから、この石碑建設にかかわる経緯について知る機会を得たのである。

筆者が修士論文を執筆の資料探索の為に法貴家の関係文書を調査中、「法貴家文書」（法貴六右衛門氏所蔵）の書類の中に、該顕彰碑の建設にかかわる一件書類が混在していたのである。

この文書を見た一瞬、筆者は咄嗟に王地山公園の石碑を思い浮かべ、思わず、息を呑んだのである。

さらに、記念碑建設当時のものと思われる石碑の写真をも、法貴六右衛門氏から拝見し、現在の状況と比較することもできたのである。

本稿は、従来知られることのなかった新資料を紹介しながら、法貴発の顕彰碑建設の事情を明らかにする

とともに、碑文の内容についても一考を進めようとするものである。

二 紀念碑建設の経緯

明治三十年、法貴発の弟子の一人である森本莊三郎が発起人物代となつて、法貴発の紀念碑が建設されることとなる。その設立の要旨は次の通りである。

故法貴発君紀念碑建設の要旨

故法貴発君ハ明治十年ノ頃本郡ニ帰り首トシテ自由ノ大義地方自治ノ説ヲ唱ヘ有志ヲ集メ親睦会ナルモノヲ起シ大ニ力ヲ民権擴張ニ盡セリ

郡内民権自由平等ノ説ヲ主張スル者ヲ仰テ始宗トス國會期成同盟會ノ大阪ニ起ルヤ君奔走頗ル盡ス所アリ又本部ニ於テ自治黨ヲ組織シ総理トナリ後自由黨ニ入り片岡健吉氏ト大阪相輝館ニ黨務ヲ擔當ス二十年東京ニ上リ天下ノ志士ト謀リ大成ヲ期セシモ不幸保安條例ニ觸レ帝都三里以外ニ退去ヲ命セラレ家ニ帰り病ヲ養フ

然レドモ憂國ノ念終始變セス愛國公黨ノ組織セラルハ君復之ニ加盟シ二十三年初期衆議院議員選挙ニ際シ競 争場裏ニ立チ大多數ヲ以ツテ兵庫縣第三区代議士ニ當選セリ其年帝國議會ニ臨ミ平生ノ抱負滿腔ノ議論ヲ吐露 セント画策スル所アリシモ宿痾再発終ニ起タズ溘焉黄泉ノ客トナル豈歎惜ノ至リナラスヤ今茲吾人等感慨ノ情 ニ堪ヘサルモノアリ依テ有志相謀リ紀念碑ヲ建設シ聊君ガ泉下ノ靈ヲ慰セントス仰キ冀ハクハ諸人士幸ニ吾人 等ノ哀情ヲ諒シ此舉ヲ贊助セラレンコトヲ其設方法ハ別ニ定ムル所アリ請フ覽觀ヲ賜ヘ

謹テ白ス

さらに、右の設立主意要旨を関係者に送付したうえで、続々と集まる寄付については、「故法貴發君紀念碑建設義金簿」(法貴家文書)を作成して、これに記録をとどめた。
寄付を受けた者に対しては左の如く領收証を渡している。

領收証(證)

一 金參拾円也

故法貴發君紀念碑建設費中へ御寄贈相成正ニ領收仕候也

明治三十年九月二十二日

發起人惣代

森本 莊三郎 ㊦

取り扱い 中川 恕庵

大西亀次郎 殿

大西亀次郎は陸軍軍医総監である。中川恕庵は、篠山藩の御殿医であり、法貴との関係は明らかでない。除幕式に先立って、法貴發の養子の法貴六郎(陸軍軍医監)から案内状が関係者に送付されたのである。

法貴六郎は、兵庫県印南郡大塩村の八木郁二の五男で法貴家に養子に入る。鳳鳴義塾、第一高等学校を經

て福岡医科大学を卒業し陸軍軍医となり栄進し、最後は陸軍軍医総監（陸軍軍医中將）となる。

三 碑文

法貴發紀念碑の表には次の如く印刻されている。

法貴發君紀念碑

衆議院議長 松田 正久 撰

松田正久は、第十から第二十一回衆議院議長を務めた。法貴とは友人間関係にあったといふ。⁽²⁾
次に、記念碑の裏面には次の如く碑文が刻されている。

所貴於天下之士者見物也明慮事也迨衆之未恤迨衆之未趨而趨忘身謀國固基礎張綱紀使天下後世被其澤也法貴君發丹波篠山人家世仕青山侯君性好學弱冠遊京都江戸津維新後遊佐賀鹿兒島藩廩奉職大蔵省及び静岡福岡二縣一旦慨然歎曰我國時務莫先於擴張民間民權而不振事不可為也辭還結多紀自治黨時君憂肺遊說各地嗜血不顧關西自由黨推君為委員君即與片岡健吉在大阪幹事者有年丁亥與健吉等上京有所規画政府頒保安條例勒出東京庚寅國會始開君為兵庫縣撰推議員而其病大漸不能臨而瞑年四十五間者莫不痛惜鄉人以予為同窓之朋求銘其銘曰

今上登極 睿聖文武 首誓神明 以續列祖
廣興會義 事決公論 上下一心 盛行經綸
旨仁言昌 神享人附 事無前例 宰臣危懼
君處其間 同志相倚 期興國會 務成聖旨
東西遊説 咯血不已 吏怒生變 逼出帝都
彌窮彌堅 固執不渝 天足時至 國會始開
推爲議員 不能土階 蓋棺論足 勁烈執比
於戲法君 天下之士

正四位勲三等 桜井勉 撰 石工本多熊太郎刻

四 おわりに

法貴発の記念碑の在る王地山公園の東方の更に小高い丘には、法貴の師である渡辺弗措の記念碑が建立されている。

奇しくも旧篠山藩の藩校の師弟の碑が死後も尚且つ師弟關係を保つが如くに同じ王地山公園内に在る。

最近、自由民権運動研究はやや下火であるが、丹波地方の自由民権運動の中心人物であった法貴発の記念碑は今は訪れる人もなく、ただ苔むすに任せているだけである。

・古墳文化

・古代国家の成立

・奈良の都

・平安京の時代

・武士と荘園

・受領と院政

・平安文化

(3) 古墳文化

(4) 古代国家の成立

(5) 奈良の都

(6) 平安京の時代

(7) 武士と荘園

(8) 受領と院政

(9) 平安文化

3、中世(小山)

(1) 時代の概観と年表

(2) 中世から七項目を執筆

〈以下は項目例〉

・武家政治のはじまり

・蒙古の来襲

・鎌倉文化

・南北朝の動乱

・室町時代の民衆

・室町文化

第二章 中世―時代の概観

(1) 武家政治のはじまり

(2) 蒙古の来襲

(3) 鎌倉文化

(4) 南北朝の動乱

(5) 室町時代の民衆

(6) 室町文化

・戦国時代の社会

(7) 戦国時代の社会

4、近世(勝男)

第三章 近世―時代の概観

(1) 時代の概観と年表

(2) 近世から八項目を執筆

〈以下は項目例〉

・天下統一

(1) 天下統一

・江戸の幕開け

(2) 江戸幕府の幕開け

・閉ざされた日本

(3) 「鎖国」体制下の対外関係

・江戸の町と村

(4) 町と村

・近世日本の商品流通

(5) 経済力の発展

・泰平の世

(6) 泰平の世

・近代への胎動

(7) 幕政改革

・近世社会の揺らぎ

(8) 近代への胎動

5、近代(小寺)

第四章 近代―時代の概観

(1) 時代の概観と年表

(2) 近代から一〇項目を執筆

〈以下は項目例〉

- ・ 開国と幕末の動揺
- ・ 明治維新と殖産興業
- ・ 自由民権運動と立憲国家の成立
- ・ 日清・日露戦争とアジア
- ・ 産業革命の光芒と第一次世界大戦
- ・ 大正デモクラシー
- ・ 大衆文化の時代
- ・ 昭和の幕開けと軍部の台頭
- ・ 日中戦争と国民生活
- ・ 太平洋戦争

6、現代（西住）（三原）

- (1) 時代の概観と年表
- (2) 現代から七項目を執筆

〈以下は項目例〉

- ・ 戦後日本の再出発
- ・ 世界の動向と日本

(1) 幕末の政争

(2) 文明開化

(3) 自由民権運動と立憲国家

(4) 日清・日露戦争とアジア

(5) 資本主義の成立と社会問題

(6) 大正デモクラシーの政治と社会

(7) 第一次世界大戦と日本

(8) 大衆文化の時代

(9) 軍部の台頭と十五年戦争の開始

(10) 戦時体制と国民生活

第五章 現代―時代の概観

(1) 戦後日本の再出発

(2) 世界の動向と日本

- ・新しい日本文化の発達
 - ・一九七〇年代の危機と日本
 - ・経済大国と冷戦終結
 - ・現代の日本と国際政治
 - ・今日の日本とその課題
- (3) 新しい日本文化の発達
 - (4) 一九七〇年代の危機と日本
 - (5) 経済大国と冷戦終結
 - (6) 現代の日本と国際政治
 - (7) 今日の日本とその課題

以上の比較から各執筆者の執筆傾向は二つに分類することができる。第一章、第二章、第五章の執筆者は、与えられた項目に従い、その枠内で執筆することをよしとする方々である。もう一方は、第三、第四章に見られるように、既成の枠をよしとすることなく、独自の項目を立て執筆した方々である。どちらが優れているかはもちろんはかるべくもない。ここに、各執筆者の個性が十分発揮され、このテキストに深みと充実感を与えているように思われる。専門を持つ複数の執筆者の個性が共同して執筆されたことにより、完成したテキストは、私の持論である。「正確さ」は言うに及ばず、「わかり易さ」とともに、「面白さ」が加味された著作に仕上がったと自負している。

次に、このテキストを使用して、各執筆者が現場でどのような学習法を展開しているかについては、期間的に使用を始めてから今日までの期間が短いため、全てをここに開陳することはできない。

今後は、別に作成したCDR(『日本史副読本』を、そのまま収めている)を、いかようにも加工し工夫して、使用されることと思われる。私の場合、大学においては、受講者に各章の「時代の概観」を二〇〇〇字から一五〇〇〇字へ、さらに一〇〇〇〇字へと圧縮して記述させることで、時代の核心を理解する学習を行っている。初めは、

単に文章を短縮して記述していた者も、やがては内容そのものを、さらに書かれている核心を掴み、自らの言葉に変えて記述するようになる。各時代を専門とする教師が何百年にわたる時代を二〇〇〇字に纏めた「時代の概観」は、小手先の短縮による記述ではまとめることができるものではない。結局、学習者のだれもが、内容を十分把握し、自分の頭で整理がつくまで考え抜き、本文に書かれ文字に縛られず、自らの言葉で纏める以外、二〇〇〇字を一〇〇〇字に圧縮して纏めることは、不可能であることを感得するのである。実際に受講者の書いた具体的文章を事例として、ここに挙げることは、字数の制約から記載できないのが残念である。しかし、このテキストの目的である、歴史は暗記ではなく、理解することであるということから言えば、実践例の一つとして、述べておくことにしたい。

最後に、執筆いただいた各氏を紹介してこの項を閉じることにする。

今井豊氏（第一章 原始・古代担当、兵庫県立三木高等学校）、小山真永氏（第二章 中世担当、同県立社高等学校）、勝男義行氏（第三章 近世担当、同県立三田祥雲高等学校）、小寺正敏氏（第四章 近代担当、同県立三木高等学校）、三原慎吾氏（第五章 現代担当、同県立明石北高等学校）、西住徹（第五章 現代担当と全章統括、同県立神戸工業高等学校）の六氏である。

小寺正敏氏を除いて、全て兵庫教育大学大学院教育研究科・教科領域教育専修の修士課程を修了された方々である。小寺氏は、ごく最近、共著として、大学での講義用テキストを出版された。¹²⁾

(注記)

- (1) 濱名篤、川嶋天津夫『初年次教育―歴史・理論・実践と世界の動向』(丸善株式会社、平成一八年)。
- (2) 山田礼子『一年次(導入)教育の日米比較』(東信堂、二〇〇五年)。
- (3) 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』(文部科学省、平成一二年二月、平成一七年一部改訂)。
- (4) 日本政治史学会報告：依田博「政治学教育の意義と実践―ジェネリック・スキル、カリキュラム、そしてFD」(関西学院大学、二〇〇八年一月二日)。
* FD Ⅱ 「教育力向上への組織的な取り組み」。(読売新聞教育取材班『教育ルネサンス 大学の實力』中央公論新社、二〇〇九年) 三六四頁。

(5) 同右。

(6) 同右。

(7) 西住徹「生徒の歴史認識を育てる教材作り―「わかりやすく」、「楽しく」、「正確に」の追求―」(学校教育学会『学校教育研究』『学校教育学』第九巻、一九九八年一〇月)。

(8) 西住徹「生徒の学習意欲を高める日本史の取り組み―三年間の教材作りとその実践―」(学校教育学会『学校教育研究』第八巻、一九九七年)。

(9) 〈小項目〉については、平成二二年度発行の各社教科書(『日本史』A・B)一覽を参考とした。

日本史 A

番号	教科書・番号	書名	発行者	著作者	備考
1	日A011	日本史A 現代からの歴史	東京書籍	田中彰ほか一五名	
2	日A008	高校日本史A 新訂版	実教出版		
3	日A012	日本史A 改訂版	三省堂	青木美智男ほか二名	
4	日A013	高等学校 日本史A 改訂版	清水書院	佐々木寛司ほか一〇名	
5	日A013	日本史A 改訂版	山川出版	高村直助、高梨利彦	
6	日A010	現代の日本史 改訂版	山川出版	渡邊昭夫ほか二名	○
7	日A014	高等学校 改訂版 日本史A人・くらし・未来	第一学習社	岩崎宏之ほか七名	

番号	教科書・番号	書名	発行者	著作者	備考
1	日B003	新選日本史B	東京書籍	藤尾正英ほか七名	
2	日B004	日本史B	東京書籍	山本博文ほか一名	○
3	日B013	高校日本史B 新訂版	実教出版	宮原武夫ほか一六名	
4	日B014	日本史B 新訂版	実教出版	脇田修ほか一五名	○
5	日B015	日本史B 改訂版	三省堂	青木美智男ほか一二名	○
6	日B016	高等学校 日本史B 改訂版	清水書院	加藤友康ほか一名	○
7	日B017	高校日本史 改訂版	山川出版	石井進ほか三名	
8	日B018	新日本史 改訂版	山川出版	大津透ほか三名	
9	日B012	詳説日本史 改訂版	山川出版	石井進ほか三名	○
10	日B011	新日本史B	桐原書店	宮地正人ほか一名	
11	日B002	高等学校 最新日本史	明成社	村尾次郎ほか三〇名	

*左記一八点の教科書(又は『指導書』)を、本文執筆のために参照した。特に「備考」○印(各社の主力教科書)は、最新語句の記述にあたって、参考とした。

(10) 読売新聞(一九九四年二月二七日)『感彩人(かんさいじん)』村上三島氏(書家)の記事より。

(11) 注記(9)に同じ。

(12) 米原謙・長妻三佐雄編『ナショナリズムの時代精神—幕末から戦後まで』(萌書房、二〇〇九年)。